



TITLE:

## 2)「研究開発コロキウム」報告〔要約版〕：〔グローバルCOE〕採択：医学教育における共感性と他者理解を深める学習についての実践的研究

AUTHOR(S):

高橋, 洋一; 鈴木, 晶子; 神戸, 尚子; 柴原, 真知子

---

CITATION:

高橋, 洋一 ...[et al]. 2) 「研究開発コロキウム」報告〔要約版〕：〔グローバルCOE〕採択：医学教育における共感性と他者理解を深める学習についての実践的研究. 研究開発コロキウム：平成20年度 成果報告書 (Colloquium for Educational Research and Development) 2009: 20-21

ISSUE DATE:

2009-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/143131>

RIGHT:

医学教育における共感性と他者理解を深める学習についての実践的研究  
A Study concerning Learning for Empathy and Understanding of Others  
in Medical Education

研究代表者 高橋 洋一 (D3) 教員 鈴木 晶子  
研究分担者 神戸 尚子 (M2) 柴原 真知子 (M2)

〔研究目的〕

医療の場には、医師だけではなく、患者、家族、コ・メディカルといったさまざまな立場の人々が同時に存在する。したがって、医師はこれらの他者との円滑なコミュニケーションを行い、共感・理解することが求められている。しかし、従来の医学教育では、科学的・専門的な知識の習得に重点が置かれるあまり、医療の場を構成する他者への共感と他者理解、すなわち「医師の心の側面」をいかに養成するのかについては十分に検討されてこなかった。このような問題意識から、本研究では、幸福感のあるコミュニケーションに向けて、医学教育における共感性と他者理解の涵養に繋がる実践的な医学教育の可能性を、教育学をはじめとする多様な分野の立場から検討を行った。

〔研究経過〕

本コロキウムでは、医学教育におけるコミュニケーションや他者理解をめぐる学習について、その教育方略としての可能性や有効性について検討してきた。また本研究は教育学研究科と医学教育推進センターの有志の教員、学生が集まって発足した「医療と教育を考える勉強会」を基にしたものでもあった。そのため、本コロキウムの申請メンバーの専門領域である教育学、心理学のみならず、瀬尾晃司（医学生）、本部かの子（高等教育論）、土出郁子（図書館学）、奥藺淳二（公共政策学）といったさまざまな研究領域に所属される各氏の協力を得られたことで、領域横断的な研究活動が可能となったと考えられる。

まず、「闘病記」を読むことによる学習をめぐっては、一部のメンバーが京都大学医学教育推進センターでの闘病記読書の演習に参加、見学を行った。同センターでは、毎年新入生の交流等を目的に、医学科の新入生(新1年生)が参加する「新入生1泊セミナー

一」が開催されている。今年度は新入生が闘病記を読んでディスカッションを行うプログラムが採用された。当日は新入生同士でペアをつくり、相手がどのような点に注目して読んだかをインタビューを行う、またグループ全員に対して、ペアの相手の闘病記および相手の感想や疑問点を紹介するといった活動がなされた。

また、ロールプレイングに代表される医療面接の方法論に演劇の要素を取り入れることで発展させた学習として、2008年6月に「応用演劇ワークショップ」を日本大学芸術学部准教授、熊谷保宏先生を招いて行った。心理劇（ルーマニアの精神科医モレノ（Moreno, J.L.）によって提唱された即興劇の形式を用いた心理療法（集団精神療法）の講義や、日本大学でのOSCE（Objective Structured Clinical Examination;客観的臨床能力試験）における医学部と芸術学部合同で行う取り組みの紹介、さらには、シアターゲームと呼ばれる演劇的要素を取り入れたゲームの体験が行われた。

そして、以上の研究成果を踏まえて、「医療ワークショップ」の企画を作成した。ワークショップ案の作成に至るまでは、特に、コミュニケーションスキルと共感性という両者の関係をどのように捉えるのか、またワークショップの目的の位置付け、さらにはワークショップの評価の方法や評価そのもののあり方をめぐって、メンバーのあいだで議論が重ねられた。

### 【研究成果】

闘病記の講読においては、特に身近に病気経験者をもつ学生の発言には、患者側の立場から「理解してほしい」という思いがあるように感じられた。また、これから医療従事者になる立場として、法や医療システムの整備をもっとしてほしいという意見もあった。このようにグループによって多様な意見が出されたことは、参加者が闘病記を読みディスカッションすることが、患者側がどのように普段感じているかを身近に感じ、医師の立場、患者の立場、様々な立場の人間が医療の場に同時に存在することを認識するのに少なからず有効であることが明らかとなった。

また演劇のワークショップについても、コミュニケーションを知識として学習するというのではなく、自ら身体を動かすかたちの学習のあり方の重要性が確認された。それと同時に、ワークショップに参加したからといって特定の能力や態度が身につくと考えてよいのか、予めそれを狙いとしたワークショップを企画することはできるのかといった論点も見出された。

この論点は、ワークショップ案の作成に向けての議論にも引き継がれ、学習に効果や成果を重視する経営学的な視点と、必ずしも明確な成果や効果として現れない学習者の成長・発達を重視する教育学的な視点の間で意見の相違がみられた。ここで見出された意見の相違から、共感性のような人間性や態度に関わるものと、その育成に向けて教育方法化することのあいだにある緊張関係という、教育という営みを考える根幹的な問いが明らかにされたと考える。